平成24年３月橋本市議会定例会会議録（第２号）その５
平成24年３月５日（月）

（午後１時00分　再開）

○議長（井上勝彦君）休憩前に引き続き会議を開きます。

日程に従い、一般質問を行います。

順番４、13番　石橋君。

〔13番（石橋英和君）登壇〕

○13番（石橋英和君）よろしくお願いいたします。二つ項目を挙げさせていただいております。

１番、市内の公園への出入口階段にバリアフリースロープの併設を、今ある階段には手すりの設置を。という要望であります。せっかく公園がありながら、利用したくてもできない人たちがいます。だれにでも使える公園にしてください。これが１番であります。

さて、２番目といたしまして、ブータン王国の首都ティンプー市と姉妹都市になりましょうという提案であります。本市を取り巻く環境があれこれ緊迫しているこの時期に、随分と気楽なテーマが出てきたなと感じておられる方も多いかもしれませんが、私なりに、今の時期に極めて重要なテーマだと思っておりますので、しばらく時間をいただきまして、提案理由の説明をさせていただきたいと思います。当局の皆さん並びに議員各位、どうかこの件、ご一考くださいますようお願い申し上げます。

現在、橋本市は中国泰安市、アメリカロナ・パーク市と姉妹都市の関係にあります。友好協定を云々する際、必ず取りざたされるのが、その経済効果でありますが、私の意見を率直に申し上げますと、本来、友好とはお互いが敬意と誇りを共有し合えればいいのであって、双方の子どもたちに夢を与えられればそれで十分であって、友好国を相手に金をもうけようなんぞと考えるべきものではありません。

さて、さきの戦争が終わって、家がなく、物がなく、食料がなかった日本は、その寒さとひもじさから抜け出すために、物をつくること、外国から食料を買うための金をもうけることに国力のすべてを注いできました。そして、敗戦国日本は、わずかな時を経て見事に経済大国として復活を遂げ、国民は暖かい家に住み、あり余る食料を手にしました。物、物、物、金、金、金で突っ走ってきて、世界に冠たる豊かな国、幸せな国を築き上げたと私たちは一度は確信しました。しかし、内外に反論やら否定的な事例もあり、議論は尽きません。

例えば、イースタリンの逆説であります。アメリカの経済学者イースタリンは、経済発展を遂げた日本国民の生活に対する満足度は逆に低下しており、経済成長率の伸びと国民の幸福度は一致しないと言っておりますし、日本がＧＮＰ世界第２位の当時、イギリスの社会心理学者エードリアン・ホワイトが、「国民の幸福度順位表」なるものを発表しました。なんと日本国民の幸福度順位は、先進諸国で最下位はおろか世界で90位でありました。やっぱり日本は何かがおかしいのかもしれません。

加えて、日本が経済成長を遂げてから、うつ病患者の数が激増しており、さらには自殺者数は13年連続で３万人を超え、自殺率はアメリカの２倍以上、世界でも旧ソ連諸国とともにトップレベルであり、交通事故による死亡者数の３倍、時には６倍を超えた年もありました。アジアの優等生、巨大経済国日本、その実態は、うつ病大国、自殺大国でもありました。本当に日本は世界に冠たる豊かな国、

幸せな国を築いていたのでしょうか。

ＧＮＰ（国民総生産）、ＧＤＰ（国内総生産）といった経済指標では常にトップクラスを維持してきました。ＧＮＰを増やす政策こそ、国民の幸福を増やすことだと疑わず、ずっと日本はＧＮＰの奴隷でありました。

そんな中、この地球上の別のところで、国民の幸福の度合いを測る指標として新しい考え方が生まれてきていました。ＧＮＰ（グロスナショナルプロダクツ）が国民総生産であるのに対し、ＧＮＨ（グロスナショナルハピネス）、国民総幸福量という指標であり、これは、さきのブータン国王ジグミ・シンゲ・ワンチュクが提唱して、ブータン国憲法の基本理念に据えて国政をとり行い、やがては自国民に、私たちは世界で一番幸福な国民であるとまで言わしめた、驚きの理念であります。

このＧＮＨは「もう一つの豊かさ」として、世界中から注目され、日本でもＧＮＨ研究所が設立され、関心を集めております。

去年、若い国王ご夫妻の来日で一気に近い国になったアジアの小さな国ブータンでの出来事でありました。彼らは、ヒマラヤ山麓、はっきりとした四季があり、米を主食とし、勤勉で敬けんなる仏教徒であり、顔も着るものも日本人そっくりであります。一方、私たちも高野山麓、四季があり、米を主食とし、多くの仏教徒が暮らしている橋本市であります。

そこで、橋本市民とブータン市民の友情の構築を願って、かの国の首都ティンプーと姉妹都市協定を結ぼうではありませんか。首都とはいっても人口は10万人に満たないまちでありますが、その人たちからグロスナショナルハピネス「もう一つの豊かさ」を学んでみようではありませんか。経済至上主義国日本の尺度で測れば、ブータンは極めて貧しい国のグループに属します。なのにどうしてブータン国民はそんなに幸せに暮らしているのかを、私たちは今、考える時期に来ていると思うのであります。なぜなら、残念ながら日本の経済成長はそろそろ限界であります。私たちは、これから先、物と金以外のよりどころも探しはじめなければならないのであります。

日本では、文化も教育も福祉も、そこに割り当てられている予算の額がそのまま重要性の尺度でありました。予算をつけていれば文化は守れるし発展もする。金をかけているのだから日本の教育は大丈夫なんだ、であります。この部分が違うのであります。ブータンの文化は金ではなく人が守っているし、日本の先生がブータンに行ったとき、どうしたらいい教育ができますかと尋ねたそうであります。そしたら、簡単なことですよ、それはあなたがいい教師になれば、その日からできますよ、が答えだったそうであります。

事実、私たち橋本市議会も予算の獲得合戦をやってまいりました。しかし、いつか国の橋本市の予算額が減ってしまったら、私たちは文化を守っていけるのか、教育を維持していけるのかが真っ先に問われます。教育を金に頼り過ぎてはいなかっただろうか。子どもたちに、物と金だけに価値ありと教えてはこなかっただろうか。気の毒なほど貧しいのに、うらやましいほど豊かに暮らしている国ブータン。彼らから学ぶことこそ、将来の私たちを救ってくれる貴重な何かだと私は考えるのであります。

間もなく大阪市長を震源とした大変革が起きようとしています。地方が自らの意志で変わり始めたこの時期に、私たち橋本市も国や県に頼らずに、橋本バージョン「幸福のまちづくり」に着手しようではありませんか。

今年の夏ぐらいからブータン観光のブームが始まりそうですが、ついこの間まではアジアの秘境とまで呼ばれていた地域であり、い

ざ行くとなればとても不安でありましょう。そんな人たちや興味を持っている人たち、子どもたちのために、ブータンの資料をたくさん集めて、「日本で一番ブータンに近いまち橋本」を新たな観光資源として、「橋本に行けばブータンが見える、橋本は高野山観光とブータン観光の入り口のまち」をキャッチフレーズに、新たなまちの魅力を発信していこうではありませんか。黒河道で注目を集め、いやしの湯に入ってもらってから高野山へ。これが、これからの橋本市の観光メニューでありますが、それにブータンの魅力をプラスして、二つの宗教都市のオリエンタルな香りが混じり合う観光資源相乗効果は、必ずや観光立市の起爆剤になってくれると思うのであります。

まずは、早い時期に木下市長がブータン王国に行って、ジグミ・ケサル・ワンチュク国王を表敬訪問し、いろんな話をしてこられることを要望いたします。例えば、橋本市長発行の有効パスポートを持った日本人には、旅の安全と盛りだくさんのすてきな思い出を提供してくださいとか、こちらからは柿の苗木と栽培技術を差し上げましょうとか、次回は、ティンプー市長ご夫妻を橋本市長の案内で高野山にお連れしますとか、の話をであります。

敬けんなるチベット仏教の王国と真言密教の聖地高野山、これまではとても遠い国だったこの二つの宗教都市が、橋本市長の呼びかけで友好の第一歩を踏み出す光景は、まさに歴史的であります。限りなくドラマチックであります。古ぼけた歴史遺産だけが観光資源ではありません。今、目の前で起きている生のドラマこそが、まさに旬の観光資源であります。再生産可能な橋本市がつくり出せる資源であります。国はこんなことはやってくれません。地方政治の仕事であります。私たち地方のまちが自ら第一歩を踏み出し、つくり上げていくべきものであります。

私が議席をいただいて、そろそろ５年になりますが、これまで、未来に向かって夢をつかみに行きましょうという提案は、残念ながらやってまいりませんでした。地方政治の端っこに身を置いている者の１人として、この本会議場から市民に向かって、こんな夢はいかがでしょうかと語りかけることも、たくさんある議員の仕事のうちの一つだと思いました。

無から有を生み出すマジック、これを政治と呼ぶそうであります。市民はいつの世も、政治家たちに感動のマジックを期待してやみません。橋本市は高野山とブータンへの入り口のまち、その時々にそこで起きる旬のマジックを提供しながら、夢いっぱいのまちづくり。その昔、三蔵法師がヒマラヤのふもとにあるという、すべての民を幸福にできる巻物を求めてシルクロードを西へ向かいました。千年の時を経て、今もなおヒマラヤの山懐にあるという幸福の花を咲かせる種を探しに、ブータン王国へ行ってみようではありませんか。

以上でございます。どうもご清聴ありがとうございました。

○議長（井上勝彦君）13番　石橋君の一般質問に対する答弁を求めます。

建設部長。

〔建設部長（松浦広之君）登壇〕

○建設部長（松浦広之君）市内の公園への出入口の階段にバリアフリースロープの併設を、今ある階段には手すりの設置を。についてお答えします。

市で管理している都市公園は現在53箇所あります。和歌山県福祉のまちづくり条例が施行された平成８年以降に設置された都市公園についてはバリアフリー化がされていますが、それ以前に設置された都市公園についてはバリアフリー化が進んでいないのが現状です。

都市公園のバリアフリー化について、課題であることは十分認識しており、高齢者や身体の不自由な方への配慮が特に必要と考えています。

既に本年度より、バリアフリー化を含めた都市公園の長寿命化計画策定を進めており、利用者数等を考慮した優先順位の高い公園から、今後順次実施する方向で検討していますので、ご理解のほど、よろしくお願いします。

○議長（井上勝彦君） 理事。

〔理事（吉田長司君）登壇〕

○理事（吉田長司君） 次に、ブータン国と友好を深め、良いところを学び、経済至上主義の日本を見直しましょうとのおただしについてお答えいたします。

ブータン国王夫妻が昨年新婚旅行で来日され、日本各地を精力的に回る姿がニュースで流れていたのは昨日のように思われます。中でも、国王夫妻は東日本大震災被災地である福島県の小学校を訪問され、国旗である「竜」についてのお話をされていた映像は、脳裏に鮮明に残っているところです。

また、ブータン国王の唱えるＧＮＨ（国民総幸福度）が話題となり、我が国のこれまでの経済至上主義に対し、ブータン国の調和の精神と質素で謙虚な姿勢に、もっと新しい価値観が必要ではないかと多くの人が感じているところだと思います。

議員のおただしのとおり、ブータン王国は経済面だけで見れば日本より貧しい国ではあるかもしれませんが、ブータン国民の９割が幸せを感じているというブータン政府による調査結果からも明らかで、物質的な豊かさよりも平等感・幸福感を追求する「幸の国」と言えます。

昨年の東日本大震災以降、大きな価値観の変化が起きていることが実感されます。それは、「お金や名誉よりも家族、命を大切にしたい」という生き方が主流になり始めてきたと思われます。

本市としても、1960年代から進んだブータン王国の開発・研究により、「幸福こそ人の、そして国家の究極の目標」としてその概念を生み出されたＧＮＨ（国民総幸福量）、いわゆる幸せの指標を「日本一幸せな橋本市」とし、めざせればと考えます。

次に、ブータンとの友好都市関係を新たな観光資源にして、観光立市を図りましょう、とのおただしについてお答えします。

さきに述べましたブータン国王の国会演説や東日本震災地の訪問は、多くの方に感銘を与えたものでありました。金銭や物質的な豊かさより、精神的な豊かさに幸福を求めるブータン国民の人生観に共鳴する方も多いと思います。ブータン王国は、気候、風土や仏教文化の背景を持ち合わせており、日本とよく似ているところです。織物産業や高野山の仏教文化を軸とした広域観光活動の交流も考えられるところです。

本市は現在、中国泰安市との友好都市、アメリカロナ・パーク市との姉妹都市提携を結んでおり、新たな友好都市提携は市民の意向や事務手続き上の課題等もありますので、今後の検討課題とさせていただきたく、ご理解のほど、よろしくお願いいたします。

○議長（井上勝彦君） 13番　石橋君、再質問ありますか。

13番　石橋君。

○13番（石橋英和君） どうもありがとうございました。公園のバリアフリー化につきましては、壇上で言わせていただいたとおり、どうしても皆さんも、今、年代的にも健康で元気に歩いて、でも、ちょっと自分たちの目でものを見てしまったら、あの公園でもいいと思ってしまうこともありがちなんですけども、ふだん行きたくても行けない市民がおるとい

う以上、やっぱり考えなければならない問題だということを要望させていただきました。

続きまして、この２番目であります。本当に私も去年国王ご夫妻の来日までは、そんなにブータンというところを知らなかったし、でも、あの国会での演説を日本語訳を聞いてますと、本当にさわやかなイメージと魅力ある国民性、国だなということで気になりましたもので、あれ以降いろいろと調べましたら、ますます日本にないものをたくさん持ってるなということが、それと何より一番気になりましたといいますか、そんなに経済的には、そんなにというか本当に貧しい国なんですね。日本人の目で見れば。それがあんなにも全国民が豊かな気持ちで暮らしているという、その秘密はどこにあるんだろうということを気になりまして、いろいろ調べもしたし、先ほど発表もさせていただいたのであります。

特に教育の問題が、本当に日本と違う教育観というものを持って取り組んでいるあたりが、大変興味深かったわけでございます。ちょっと教育長のご意見ございましたら、ちょうだいできればと思います。

○議長（井上勝彦君）13番　石橋君の再質問に対する答弁を求めます。

教育長。

○教育長（松田良夫君）今、教育委員会として大事に取り組んでいることの一端をちょっとご紹介させていただいて、そしてブータンから私どもが学ぶべきことについて述べさせていただきたいと思います。

現在、学校が非常に重要な課題として取り組んでいる一つのことに、地域に開かれた学校づくり、こういうことがございます。本来、学校は子どもたちの集団というのを前提にして学力をつける、豊かな心を育む、あるいは運動能力、体力をつけていく、これが今までもこれからも本来的な学校の役割かと思っています。

しかし、今、学校を開き、さまざまな形で地域の協力を得ない限り、そういった教育ができない状況になってきているということが、学校を開くということの前提になるわけです。よく家庭、地域の教育力が低下した、そういう言われ方をします。一体、何が変わってしまったのかということなんです。

かつて地域で繰り広げられていた、異年齢の子どもたちの集団活動が消えました。これによって、地域で子どもたちが獲得していた自然体験あるいは社会体験、生活体験、そのものが非常に希薄になってきてございます。そして、地域のいわゆる連帯意識の希薄化、これもささやかれてございます。子どもたちが地域の大人と触れ合うことはなくなりました。子どもたちが触れ合う大人は先生と我が両親だけと、そういう状況も多くなってきたように思います。

かつて子どもたちは地域の大人に触れ合うことで、怖いおっちゃんに怒られながらも規範意識を学ぶことができたり、あるいはその地域のさまざまな刺激の中で、家庭がしっかり家庭の家族としてのぬくもりを伝え合ったり、あるいはしっかりしつけをしていたという状況もありました。これについても、各家庭が孤立する中で、いわゆる豊かに家族が触れ合っていく、あるいは子どもたちに、それに基づいてしっかりしつけていく、そういう状況も少なくなってきた。その状況を指して、家庭あるいは地域の教育力が低下してきた、そういうふうに言われているというふうに私自身理解してございます。

今、学校を開くことによって、そういった地域の教育力、あるいは家庭の教育力を復活して学校を良くしたい、地域から始まる子どもの教育を考えたい、それがいわゆる開かれた学校づくりの大きなテーマである、そうい

うふうに思っています。

先ほど石橋議員が言われたように、ブータンはいわゆる国民総幸福量という形で、地域でのコミュニティを大事にする、あるいは家庭で家族の触れ合いを大事にする、それを幸福度を図る尺度にしよう、そういう取り組みをされています。ずっとそのことを続けて来られました。

私ども、学校を開くことによって、そういったいわゆるコミュニティづくり、家庭づくりにつなげていって、学校を良くしようという取り組みです。

そんな中で教育委員会が今取り組んでいる一つが、家庭教育支援の取り組みです。これは何をしているかというと、家庭教育支援チーム、ヘスティアの方が、学校へ行って保護者と保護者がつながり合う懇談会づくりをやってくれています。そして、子育てがしんどい家庭については、家庭訪問することによって自信をつける取り組みをやってくれています。

それから、共育コミュニティという取り組みをやっています。これは、学校の要望に応じて多くのボランティアの方に学校へ来ていただいて、子どもとボランティアの方の触れ合いをつくる。そして、ボランティア同士の触れ合いから、地域で子どもを育てていく環境づくりをしていく、そういうねらいでございます。共育コミュニティは共育ち、ともに育ち合うという共育という言葉を充てておるんですけど、大人も子どもも触れ合うことによって育つ、そういうコミュニティづくりというのが共育コミュニティです。

それと、ほかに放課後子ども教室、これも子どもと大人が触れ合う機会です。あるいは、青少年育成市民会議の方のそういう取り組みになるかもわかりません。それから、今年からミニ集会というのも各学校でやっていただいてます。それから、各学校では井戸端会議、これも保護者同士がつながり合う、そういう機会になればということで、地域から始まる、地域のいわゆる人と人とのつながり、家族のぬくもり、そこから学校を変えていく、それのすぐれた一つのモデルとして、ブータンから学ぶこと、多いと思ってございます。

図書館に行きましたら、こんな本があったんです。「21世紀仏教への旅」五木寛之さんの本です。紀行文ですので、非常に読みやすかったです。この中で、五木さんはブータン仏教のいわゆる本質を知りたいということで、ある方に取材をかけておるんです。カルマウラという方なんです。この方はブータンの憲法の草案をつくったとか、あるいは今もブータン国を指導するリーダーとして活躍されている方なんですけども、この方の本を読んでおって、非常に感銘を受けた箇所があるんですけども、ちょっと紹介させていただきます。

五木さんの質問に答えて、カルマウラさんは答えています。「すべてのものは互いに依存し合い、関係し合って生きている。そうした認識の仕方が仏教の思想における最大の特徴だ。」こういうふうにカルマウラさんは語られています。そして、カルマウラさんは同時に社会学の専門家なんです。その社会学の立場から、こんなことを語っているわけです。「一番大切なのは、個人ではなく関係だと言えます。なぜなら、関係ということなしに個人は存在し得ないからです。個人より先に関係があると言ってもいいかもしれません。すべての現象は相互に関連して起こるという本質的な認識に基づいて言えば、幸福ということも個人だけではあり得ません。他者との関係の中でしか個人は幸福になれないのです。これは、一部の人々が不幸な状態にあるときに、自分が幸福だということはあり得ないということです。他人の不幸を置き去りにして自分

の幸福を追求することは、非常に大きな負債を伴うことになるでしょう。大切なのは、人間関係の改善を図ることですが、それは個人が自分の行動を変えることによって実現できます。なぜなら、１人の行動はそれだけでは終わらず、必ず他とつながって影響し合っていくからです。」こういうふうなことが書かれてあるわけです。

だから、学校を開くことによって、地域の方が学校づくりに参加していただく、それは個人の行動を変えることになって、その方の心や相手の心も変えていく、そういう中で、このブータンの仕組みをいわゆる学校発の地域づくり、そういうところに大いに役立てていきたい。改めてブータンという国と触れ合うことによって、そういうことに確信を持てましたので、あらゆる機会でこの本から学んだこと、私自身も伝えていきたい、そういうふうなことを改めて考えさせていただきました。

以上です。

○議長（井上勝彦君）13番　石橋君。

○13番（石橋英和君）どうもありがとうございました。私もしっかり頑張ってやらせていただいたつもりでおりますが、それ以上に熱心にご意見を賜りまして、どうもありがとうございます。

今、教育長言っていただいた、親、地域コミュニティ、教育とはそういうものであるという、まず前段におっしゃっていただいたことが、先ほど私が申し上げました、いい教育をするためにはどうしたらいいんでしょうねと日本の先生が聞かれたら、あなたがいい教師になりなさいと言って、その次には、その子どもの親がいい親になりなさいという言葉がついているんでしょうし、その地域コミュニティがいい地域になりなさい、そこまでできたら教育はもうできてますよというような言葉が、多分後についているんだろうと思いますが、やっぱり日本の教育は子どもに矢を向けるし、それで金をかければ、金が足りないから教育が悪いんだ、子どもが悪くなってしまうんじゃないかなんていう議論が多いのが、大変気になっておるところでございます。教育長がおっしゃったように、いろんな角度から教育は研究されていかれるべきものであると思います。どうか今後とも、よろしくお願いをしたいと思います。

ちょっと理事にお答えいただいた中で、いきなり友好都市協定というのもという、確かにそれはそのとおりだと思うんです。でも、ちょっとそういった関係の調べましたところ、島根県浜田市がブータン国と友好協定を結んでおられます。それ以外には、姉妹都市ということではなくて、例えば愛知県の半田市が半田ブータン青少年交流協会というものを設立をして、両国の青年たちが友好をということであります。ほかに、広島ブータン共会、横浜ブータン王国友好協会、北海道ブータン協会などがありまして、以前からブータンという国と日本の各地で友好していこうという実態があるわけでございます。ですから、まだまだ調べることもせずにいきなりという、確かにそのとおりでございますが、まず、青少年の交流協会ぐらいの設立から始めて、徐々にという方法も十分あろうかとも思います。

ブータンとの窓口といたしましては、ブータン国の名誉領事館があるんですけども、これは領事館ではなくて名誉領事館でありまして、日本人が領事を務めている、これはケースであります。ですから、主にいろいろとお世話願えるのは、日本ブータン友好協会、東京都文京区音羽に日本ブータン友好協会が置かれておりまして、いろんな相談に乗ってくれると思います。どうか一度お尋ねいただい

て、いろんな話を聞いて、前へ進められるものであれば一歩前へ踏み出していっていただきたいという要望でございます。

過去に、去年がブータン国国交25周年の記念に際し、国王ご夫妻のご結婚があって、ご招待という格好でお見えになったわけでございますが、前国王の頃ですか、昭和天皇ご崩御に際して、国王がお葬式に出席されて来日されたと。そのときはブータン国民が１カ月喪に服してくれたということもございました。このたびの東日本大震災では、震災の翌日から国王主催で被災者の安全祈禱をする式典を開催して、100万米ドルの義援金を日本に送っていただいて、ブータン国内は主要寺院で３日間にわたる一斉法要が営まれたということで、非常に日本に対しては、以前より友好の気持ちを持っていただいていて、国王の国会での演説を聞かせていただいても、非常に日本を敬って見てくれているのが非常に感激するところでございます。

一つのエピソードをちょっと見つけたんですけども、飲んでいるお茶にハエが飛び込んで、大丈夫ですかと尋ねられて、その尋ねてくれた方が中国人だったら、中国人はお茶の文化を大切にする国民ですので、中国人が尋ねてくれたらそのお茶は大丈夫ですかという、交換しましょうかの意味らしいんですけども、その尋ねてくれた人がブータン人だったら、その飛び込んだハエは大丈夫ですかと聞いてくれてるんですよというエピソードがあるらしいんです。だから、ハエに対してもこんなに優しい気持ちで接している国民性、世界中の人間に対しても、もっと優しい気持ちで日々を送って、人間を見ている国民なんだろうという想像ができるわけでございます。

先ほど長々と聞いていただきましたが、言いたいことは三つあります。一つは、やっぱり日本の価値観というのが考え直すべき、ブータンから教わって、日本の価値観は本当に大丈夫かなというあたりを考えなければいけないんじゃないかということが一つ。

それと、観光資源としての、例えば具体的に、ティンプー市長を橋本市長が高野山へ案内して、そしたら本当に皆興味も持ってくれるだろうし、高野山も再確認をしてもらえるという、その意味において、観光資源というのはついつい過去の歴史遺産、昔から持っているものを何とか使えんかという発想になりがちであります。しかし、私たちの橋本市の持っておるものが、そんなん京都や奈良と比べたら、これはもう勝てっこないんです。国宝ばっかり並べている京都に、どれだけのこっちがあるかといえば、それはもう負けるのはわかっておるんですけども、でも、観光資源は何も古いものだけじゃない。今つくれば、いろんな興味を持ってもらえれば、橋本市に向かって来てくれるんだろうと。というのは、今、橋本市はつくることを考えるべきだろうと、そういう一つの言いたかったことであります。

そして、三つ目は、やっぱり議会をやっている中で、いろいろ大変なことに出くわすけども、市民に向かって夢も語る責任があるだろうと。将来こんな楽しいことをつくっていきましょうという、そんな仕事も議会の仕事として忘れてはいけないなという、その辺のところを申し上げたかった今回の私の一般質問でございますが、担当どなたということはもうないと思います。どなたでも、もしご意見があれば、ちょうだいをいたします。なければこれで終了といたしますが、どなたでもご意見があれば、ちょっと議長、いただいていただければ。

○議長（井上勝彦君） 今、三つの提案をされましたけども、それに対するご答弁。

経済部長。

○経済部長（岡松克行君）ただ今のご質問でございますけども、私もブータン王国につきましては、インターネット、この間からのテレビ等の認識しかございません。その中で、日本の九州と同じぐらいの面積を有し、人口70万人というヒマラヤの小さな国のことについて、国王が述べられています。

その中で、一般的にはお金や経済の成長と幸福度、これは比例するということで言われておりますけども、ブータン国民は、先ほどからも再々議員、教育長がおっしゃられているとおり、幸福度については物質的、経済的ではなく、精神的な豊かさが幸福を求める考え方であると言われております。それのＧＮＨ、先ほどから言われてます国民総幸福量につきましては、90％の国民の人が幸せであるとの結果が出ております。その中で、ブータンを旅した方の感想ではございますけども、「時間はゆっくり流れている。ブータンの人々は、人々の優しさと礼儀正しさを心に満ちている。」という感想を述べられております。橋本市といたしましても、橋本市に来てもらって、優しい橋本市の市民の方であると言ってもらえるように、ブータン国の性質的な感想をも含めて、大いに学ぶところがあろうかと考えております。

以上でございます。

○議長（井上勝彦君）理事。

○理事（吉田長司君）友好都市の関係でございますけれども、浜田市、それから愛知県の半田市の例はもう確認してございます。浜田市の場合でしたら、石州和紙ですか、それの関係でということで、かなり技術研修とか貿易商の派遣とかということで、毎年人事交流をやっているようでございます。

それと、半田市につきましては、愛知万博の頃でございましょうか、愛知県との１市１交流事業、１市町村１国フレンドシップ事業という中で、半田市がブータンと南米のグアテマラを選んで国際交流の関係になったと。どちらも友好都市というより、国際交流ということでとらまえてまして、友好都市となりますと、首都のティンプーとかいうことになろうかと思います。そういうことで、いろんなものがありますので、一度研究したいなということで考えてございます。

ちなみに、橋本市の泰安の場合ですけども、泰山という山がありまして、同じように高野山がありまして、同じような地形的、歴史的背景があるということで友好都市、それから山東省が和歌山県と結んでいるということがありまして結んだということを聞いておりますので、そういうことがありましたら一番いいんですけども、ブータンの場合でしたら、人間の生き方というものを学ぶということで、国際交流の面から何とかアプローチできないかなということを考えてございます。

以上でございます。

○議長（井上勝彦君）これをもって、13番　石橋君の一般質問は終わりました。